

COVID-19状況下での成人看護学慢性期における 遠隔式学内実習に関する学修効果

馬場 才悟¹⁾・大庭 悠希¹⁾・南里 真美¹⁾・川島 睦子¹⁾
大島 勝也²⁾・重松 直也²⁾・鷹居 樹八子¹⁾

(¹⁾西九州大学看護学部, ²⁾医療法人おおしまクリニック)

(2022年1月31日受理)

Effects of Adult Nursing Practice (a chronic stage) with bidirectional communication link of remote on-campus utilizing internet between local clinic and University in COVID-19 pandemics.

Saigo BABA, Yuuki Ooba, Mami Nanri, Mutsuko Kawashima,
Katsuya Ooshima, Naoya Shigematsu, Kiyako Takai

*Nishikyushu University, Department of nursing
Medical corporation Ooshima clinic*

(Accepted: January 31, 2022)

要 約

今回、大学近隣にある地域の内科クリニックの協力を得て、そこに通院する患者と学生がWeb会議アプリ（Zoom）を利用した遠隔でコミュニケーションを行う成人看護学慢性期における遠隔式学内実習を実施できた。そこで本研究では、遠隔式学内実習を行った学生が記述した学びと課題レポートと臨地実習を行った学生が記述した学びと課題レポートの内容についてテキストマイニングを使って分析し、遠隔式学内実習と臨地実習における共通の学びを抽出することで、遠隔式学内実習が臨地実習に近づける学びとなるかを明らかにすることを目的とした。その結果、患者の自己効力感を高める視点や患者を観察することの重要性、患者の社会参加を考える視点、患者の発言内容や深いコミュニケーションをとることの大切さが、臨地実習ができた学生との共通の学びであることが明らかになった。

キーワード：成人看護学実習，双方向的コミュニケーション，遠隔式学内実習，クリニック，COVID-19

Key word : Adult Nursing Practice, Bidirectional communication,
Remote on-campus practice, Local clinic, COVID-19

I. はじめに

病院での臨地実習は、実際の患者との関わりを通じて、知識と技術を看護実践の場面で適用し、看護理論を結び付けた看護実践能力を養う学修の場として重要とされている。また、その教育時間は看護基礎教育の大半を占めていることから、特に臨地における学修の担保ができないことは看護教育の質の低下にもつながる。

2019年に確認された COVID-19 (Coronavirus disease 2019: 新型コロナウイルス) 感染患者数の急増による緊急事態宣言は社会全体への影響が大きく、2020年度は全国の看護系大学全体で78.7%が臨地実習を学内実習に変更せざるを得ない状況であった(日本看護系大学協議会, 2020b)。そのため、文部科学省(文科省)の指導では、臨地実習に代替できる実習として紙上事例や模擬患者、シミュレーター機器を使用した実習を学内で行うことを推奨している(文科省, 2020)。

そして、コロナ禍で臨地実習の代替として、これまで模擬患者を導入した学内実習や紙上事例を活用した学内実習が行われてきたが、それらの実践報告によると、「学生は模擬患者を演じる教員に疑問を感じる」、「患者をイメージすることが難しかった」といった報告が多く(桑村, 2021)、さらに「学習効果が低かった」という報告もある(近藤他, 2020; 民谷, 2020)。

看護実践は健康課題をもつ人あるいは、もつ可能性のある人と看護職者の人間関係を基盤に、双方にプラスの効果をもたらすものといわれている(菱沼, 2021)。そのため看護に必要とされる能力の育成には、やはり模擬患者ではなく実際の患者と向き合い、患者の表情の変化を観察すること、患者の言動・訴えに傾聴するという双方のやりとりで培われる体験がないと難しいと考えられる。

実際、A大学看護学部においても2020年度の成人看護学慢性期実習は緊急事態宣言により予定実習病院10カ所中5病院での実習受け入れが中止となり、文科省の指導に基づく学内実習に切り替えざるを得ない状況となった。

A大学看護学部は2018年に地域で活躍できる看護専門職者を育成するために設立された1学年90名定員の4年制看護大学である。そのため、A大学看護学部は地域との関わりを大切に、地域貢献とボランティア育成にも力を入れているという看護大学の中では珍しい地域の大学と位置づけられている。

そこでA大学看護学部のこのような特性をふまえて、大学近隣にある地域の内科診療所(クリニック)の協力を得て、クリニックと大学の実習室をWeb会議アプリZoomを利用した遠隔でつなぎ、糖尿病疾患のある外来通院患者(以下患者)と学生がパソコン画面を通してコミュニケーションを行う遠隔式学内実習(以下遠隔式学

内実習)を実施できた。

本研究では、遠隔式学内実習を行った学生が記述した学びと課題レポート(学内実習レポート)と臨地実習を行った学生が記述した学びと課題レポート(臨地実習レポート)の内容を分析し、遠隔式学内実習と臨地実習における共通の学びを抽出することで、遠隔式学内実習が臨地実習に近づける学びとなるかを明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

2020年度に成人看護学慢性期実習を修了した3年生の学生のうち、実習先の受け入れ中止のため遠隔式学内実習を行った4名の学内実習レポートと臨地実習を行った学生で成人期の患者を受け持つことができた4名の学生が記述した臨地実習レポートを分析対象とした。

2. 方法

学びと課題レポートとは、成人看護学慢性期実習を終了した学生が実習を通しての各自の学びと課題を実習最終日9時~11時(2時間)の時間帯で自由記述形式でまとめたものである。そして、遠隔式学内実習レポートと臨地実習レポートの内容をテキストデータ化し、テキストマイニング解析処理ソフトKH coder 3を利用して内容分析を行い、遠隔式学内実習の学修効果を検討した。

3. 遠隔式学内実習の実習目的・目標とスケジュール

遠隔式学内実習目的・目標と実習スケジュールを表1に示す。まず、事前にクリニックの院長により遠隔式学内実習に協力を依頼する患者に対して実習についての説明がなされ、協力の同意が得られた。その後、学生の代表者が受け持ち患者依頼についての説明を行い、書面にて同意を得た。

遠隔式学内実習は合計10日間の実習スケジュールで展開し、実習3日目と4日目に通院先のクリニックにいる患者とZoomを使用してコミュニケーションを行った。学生は、1グループ4名の合計4つのグループ(16名)で、大学内の同じ実習室内で各グループの代表者がグループ内で検討した内容をインタビューするという方法をとった。実習5日目にZoomを使用してクリニック院長と看護師長からの臨床講義、さらに最終日の実習10日目にはZoomを使用して看護師長からアセスメントに対してのコメントをいただき、学内実習のまとめとした。

尚、臨地実習は合計9日間の病棟実習と学内実習1日(最終日)のスケジュールで実施した。

表1. 遠隔式学内実習の実習目的・目標とスケジュール

実習目的	慢性疾患をもつ成人期にある対象者を総合的に理解し、既習の知識・技術・態度の統合により対象者の健康レベルに応じた看護を展開し、成人期にある患者のQOLの向上を目指した看護実践のための基礎的能力を修得する。
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 成人期の発達段階をふまえ、慢性疾患をもつ対象者を身体的・心理的・社会的側面から情報を収集し総合的に理解する。 2. 対象者のもつ慢性疾患の病態、検査、治療過程および生活に及ぼす影響について理解し、看護過程を展開する。 3. 対象者とコミュニケーションをとり、援助的信頼関係を構築することができる。 4. セルフケア能力を生かし、QOLを高めるための個別的な看護計画を立案できる。 5. 看護者としてのあり方や看護観を深め、自己の課題を明確にできる。 6. 専門職として倫理的行動をとることができる。
日程	内容
実習1日目	実習オリエンテーション
実習2日目	受持ち患者の情報提示、病態・治療の自己学習。
実習3日目	受持ち患者へのあいさつ、受け持ち同意の確認、情報収集 (Zoom)
実習4日目	受持ち患者とのコミュニケーション (Zoom)
実習5日目	クリニック院長と看護師長からの臨床講義 (Zoom)
実習6日目	看護計画の立案と発表
実習7日目	看護計画に基づいた教育指導案の作成
実習8日目	看護ケアの実践演習
実習9日目	教育指導実施
実習10日目	実習のまとめ (看護師長からのコメント: Zoom)

4. 倫理的配慮

本研究に協力を依頼する3年生8名に対し、成人看護学慢性期実習の成績評価が終了し、単位認定が行われた後に本研究の目的、方法、プライバシーの厳守、研究協力の有無が、以後の授業評価や学生に対する対応および他の科目の成績評価にも全く影響しない内容の趣旨を説明し、口頭と文書で承諾を得た。さらにA大学研究倫理委員会での承認を得た (A大学研究倫理審査委員会承認番号21FHS01)。

Ⅲ. 結 果

1) 学内実習レポート

学内実習レポート記載対象者は4名で、すべて女性であった。学内実習レポートからの総抽出語数は4435語であった。学内実習レポートにおける頻出回数上位5位の頻出語は「行う」54回、「患者」48回、「考える」35回、「観察」29回、「実習」28回であった (表2)。

2) 臨地実習レポート

学内実習レポート記載対象者は4名で、すべて女性であった。臨地実習レポートからの総抽出語数は2527語であった。臨地実習レポートにおける頻出回数上位5位の頻出語は「患者」57回、「生活」13回、「必要」13回、「コミュニケーション」12回、「不安」12回であった (表2)。

3) 学内実習レポートと臨地実習レポートに共通した抽出語とその抽出語を含む文脈

学内実習レポートと臨地実習レポートに共通した抽出

語は、「患者」「必要」「看護」「ケア」「行う」「実習」「考える」「疾患」「自身」「思う」「今回」であった (表2)。これらのうち、それだけでは意味をなさない名詞「自身」および副詞可能名詞 (副詞可能)「今回」の単語を除いた「患者」「必要」「看護」「ケア」「行う」「実習」「考える」「疾患」「思う」の抽出語を含む主要な文脈について検討した。その結果、「患者」「必要」「看護」「行う」「実習」「思う」の抽出語において共通の学びと考えられる文脈を認めた (表3)。

共通した抽出語「患者」を含む文脈では、学内実習レポート中の“患者の日常生活での行動と並行に考えながら患者の自己効力感を生かすことが出来た”“患者の思いを受容しながら自己効力感を生かすことがたいせつであることを学んだ”“患者の状態をよく観察することが患者の自立を効率よく行うことができる”“患者を観察することの重要性を改めて考えることができた”の文脈と臨地実習レポート中の“自己効力感を高めることで患者の禁煙や食生活改善の意欲を高めることができた”“モチベーションを下げずに自己効力感を高められるか患者との関わり方を学べた”“まず、患者さんのことをよく観察することが大切”の文脈において、いずれも患者の自己効力感を高める援助、観察することの重要性という点で共通の学びがみられた。

共通した抽出語「必要」を含む文脈では、学内実習レポート中の“患者会などの社会への参加は同じ疾患の人たちと関わってストレス軽減もでき必要”“意欲や発言の情報も吟味しながら計画をたてていく必要がある”

表2. 学内実習レポートと臨地実習レポートにおける抽出語リスト（上位30位）と共通した抽出語

学内実習レポート				臨地実習レポート			
1	行う	動詞	54	1	患者	名詞	57
2	患者	名詞	48	2	生活	サ変名詞	13
3	考える	動詞	35	3	必要	形容動詞	13
4	観察	サ変名詞	29	4	コミュニケーション	名詞	12
5	実習	サ変名詞	28	5	不安	形容動詞	12
6	思う	動詞	24	6	看護	サ変名詞	11
7	援助	サ変名詞	21	7	ケア	名詞	10
8	ケア	名詞	20	8	行う	動詞	10
9	情報	名詞	19	9	実習	サ変名詞	8
10	疾患	名詞	17	10	禁煙	サ変名詞	7
11	自身	名詞	16	11	考える	動詞	7
12	計画	サ変名詞	15	12	今回	副詞可能	7
13	理解	サ変名詞	15	13	疾患	名詞	7
14	看護	サ変名詞	12	14	影響	サ変名詞	6
15	立てる	動詞	12	15	関わる	動詞	6
16	生かす	動詞	10	16	今	副詞可能	6
17	必要	形容動詞	10	17	思う	動詞	6
18	用いる	動詞	10	18	信頼関係	タガ	6
19	アセスメント	名詞	9	19	家族	名詞	5
20	学内	名詞	9	20	学ぶ	動詞	5
21	今回	副詞可能	9	21	自身	名詞	5
22	今後	副詞可能	9	22	自分	名詞	5
23	実際	副詞	9	23	取る	動詞	5
24	事例	名詞	8	24	受け持ち	名詞	5
25	自立	サ変名詞	8	25	受け持つ	動詞	5
26	展開	サ変名詞	8	26	受容	サ変名詞	5
27	得る	動詞	8	27	成人	サ変名詞	5
28	目標	名詞	8	28	前	副詞可能	5
29	グループ	名詞	7	29	退院	サ変名詞	5
30	感じる	動詞	7	30	段階	名詞	5

注)それだけでは意味を成さない名詞「自身」および副詞可能名詞(副詞可能)は、臨地実習レポートと学内実習レポートに共通する語として分析からは除外した

“援助面だけでなく必要とされるのは患者との深いコミュニケーションである”の文脈と臨地実習レポート中の“退院後は治療や社会参加を両立しながら生活していく必要性が理解できた”“アセスメントに患者の発言内容はとても必要である”“少ない訪室の中でもコミュニケーションを広く深くとっていくことが必要であった”の文脈において、社会参加や患者の発言内容（言動）、深いコミュニケーションの必要性という点で共通の学びがみられた。

共通した抽出語「看護」を含む文脈では、学内実習レポート中の“成人看護学実習では理論（セルフケア）を用いた介入につながっていた”“患者が病みの行路を方向付けることができ、生活の質の維持に必要な看護を学べた”の文脈と臨地実習レポート中の“セルフケア能力向上や個性のある看護の必要性和不安に対する傾聴の姿勢を学べた”“病気とともに生活していく病みの軌跡で患者に今必要な看護を考えることができた”の文脈からセルフケア理論の活用や病みの軌跡理論を考えた看護という点で共通の学びがみられた。

共通した抽出語「行う」「実習」を含む文脈では、学内実習レポート中の“学内実習だったからこそ安全安楽に配慮した援助をゆっくり行うことができた”“事前学

習を通して、実習では理論を活用したアセスメントができた”“他の病棟実習と比べて学内実習はアセスメントを理論と合わせて展開できた”の文脈と臨地実習レポート中の“安全・安楽を考え、患者のニーズに合った看護を行うことができた”“今回の実習ではアセスメントを看護理論に基づいて考えることが出来た”の文脈から安全・安楽を考え、アセスメントに看護理論を活用して行えた実習という点で共通の学びがみられた。

共通した抽出語「思う」を含む文脈では、学内実習レポート中の“看護理論を用いた看護を今までの経験・学習に生かし、看護にいかせたとする”“自尊心向上に繋がる援助は自己効力感を高める意味でも有効だと思った”の文脈と臨地実習レポート中の“看護理論を活用し患者に寄り添った看護が提供できたと思う”“自己効力感の高さは患者の自尊理解や自己管理とその結果に良い影響を与えると思う”の文脈から看護理論を看護に生かした点や自尊心向上が自己効力感を高めることにもつながったという共通の学びがみられた。

V. 考 察

コロナ禍での臨地実習にかかわる学内実習の実態として、

表3. 学内実習レポートと臨地実習レポートに共通した抽出語とその抽出語を含む主要な文脈

共通した抽出語	学内実習レポートにおける共通した抽出語を含む主要な文脈	臨地実習レポートにおける共通した抽出語を含む主要な文脈
患者	患者の日常生活での行動と並行しながら患者の自己効力感を生かすことが出来た 患者の思いを受容しながら自己効力感を生かすことがたいせつであることを学んだ 患者の状態をよく観察することが患者の自立を効率よく行うことができ 患者を観察することの重要性を改めて考えることができた	自己効力感を高めることで患者の禁煙や食生活改善の意欲を高めることができた モチベーションを下げずに自己効力感を高められるか患者との関わりの方を学べた まず、患者さんのことをよく観察することが大切
必要	患者会などの社会への参加は同じ疾患の人たちと関わられてストレス軽減もでき必要 意欲や発言の情報も吟味しながら計画をたてていく必要がある 援助面だけでなく必要とされるのは患者との深いコミュニケーションである	退院後は治療や社会参加を両立しながら生活していく必要性が理解できた アセスメントに患者の発言内容はとも必要である 少ない訪室の中でもコミュニケーションを広く深くとっていくことが必要であった
看護	成人看護学実習では理論(セルフケア)を用いた介入になががっていた 患者が病みの行路を方向付けることができ、生活の質の維持に必要な看護を学べた	セルフケア能力向上や個別性のある看護の必要性と不安に対する傾聴の姿勢を学べた 病気とともに生活していく病みの軌跡で患者に今必要な看護を考えることができた
ケア	個別的なケア立てることや安全面に配慮したケアが不足していた 信頼関係があるからこそ身体面だけでなく心理面のケアを行うことができる	安全第一に考え今の状態をもう少し向上させる個別性あるケアを考えることができた ケアを行っていくために必要なことは信頼関係である
行う	学内実習だったからこそ安全安楽に配慮した援助をゆとり行うことができた 事前学習を通して、実習では理論を活用したアセスメントができた	安全・安楽を考え、患者のニーズに合った看護を行うことができた 今回の実習ではアセスメントを看護理論に基づいて考えることが出来た
実習	他の病棟実習と比べて学内実習はアセスメントを理論と合わせて展開できた 自身のパワーを回復するなど理論を用いた介入ができたと考え	
考える	複数のそれぞれの疾患のつながり、影響の仕方を考え観察するべきである どの情報を得るのかを以前の実習よりも詳しく考えなければならなかった	どうして守れないのか、どうしたら守れるのかを一緒に考えることができた 不安を表出する際は不安を逆にかき立ててしまっても考えられる お話しやすいタイミングを考えて声かけする
疾患	先生の助言があり、複数のそれぞれの疾患と生活とのつながりを理解できた 疾患、薬の副作用と生活に与える影響を考えることが大切	どのような形で疾患による影響が生活に及ぼすのかについて目を向ける大切さを学んだ 慢性的な疾患を抱える患者は、今まで培ってきた生活とその影響をふまえることが大切
思う	看護理論を用いた看護を今までの経験・学習に生かし、看護にいかせたと思う 自尊心向上に繋がる援助は自己効力感を高める意味でも有効だと思った	看護理論を活用し患者に寄り添った看護が提供できたと思う 自己効力感の高さは患者の自尊心理や自己管理とその結果に良い影響を与えると思う

注) 網掛け部分は共通する学びである共通した抽出語、枠は共通した抽出語を含む文脈

2020年度の報告書（日本看護系大学協議会，2020a）や菱沼らの報告（菱沼，2020）によると，オンラインで複数日にわたって情報が更新される紙上事例を活用した看護過程の展開や，大学院生や教員が模擬患者を演じた実習がほとんどであった。また，これらの報告書は学生の学習進度や参加状況が把握しやすいといった点や，実習準備や学習意欲を高める大変さといった教員視点でのオンライン実習の困難さが示されたものであり，学生からの学びの視点についての報告はなかった。

しかし，今回は，実習受け入れ中止に伴い，臨地実習に代替できる実習として実際の患者とパソコン画面を通じて学生がコミュニケーションを行い，情報収集から対象理解へつなげ，看護過程を展開していく遠隔式学内実習を行うことができた。その学内実習レポートを活用し分析できたことで，患者の自己効力感を高める視点や患者を観察することの重要性，患者の社会参加を考える視点，患者の発言内容や深いコミュニケーションをとることの大切さが，臨地実習ができた学生との共通の学びであることが明らかになった。そして，このような学びは紙上事例ではなく，やはり実際の患者と関わった実習であるからこそ学びにつながった内容であると考えられる。

さらに，看護の点ではセルフケア，病みの軌跡という看護理論を活用できた関わりができていた学びも臨地実習が出来た学生との共通の学びにつながっていた。そして，そのような看護理論の活用が安全・安楽を配慮した援助につながる思考に結びついていたと考えられる。

看護におけるケアリングを定義したメイヤロフは，看護の基本概念とは人間対人間の関係性を主軸にケアする人とケアされる人の相互関係によって双方が成長していく関係性と定義している（Mayeroff, 1965）。そしてこのことが患者と向き合う経験の積み重ね（看護実践知）の形成につながるといわれている（西田，2015；西田，2018；佐藤，2010）。したがって今回の遠隔式学内実習は実際の患者と関わる体験があったことで臨地実習との共通の学びにつながったと考えられた。

しかし，その一方で学生にとっての難しさや課題も残った。それはどの情報を収集するか事前に詳しく考えたコミュニケーション方法と個別的なケアを立てる視点が不足していた点である。そのため，看護学生がコミュニケーション・スキルを学習する過程において，コミュニケーション能力を活用する自信や重要性に関する認識を高める教育を併せて行うことが必要である。その上で，患者に分かりやすい説明の仕方，そして先を見据えた看護計画の立て方と目標に沿った観察能力の育成も必要と考えられた。また，遠隔式学内実習では看護技術の実践が困難であったため看護技術の修得をめざす実践面での実習として限界があったが，今回の方法で実習を行うことによって，コミュニケーションの再確認や記録の内容

を深める時間や質の確保は行えたといえる。

本研究の限界として，今回の研究で使用した学内実習レポートと臨地実習レポートは成人期の患者を受け持った学生を対象としており，合計8名と少ない中での学びにつながるデータ収集であったため言葉の広がりが少ない傾向があった。そのため本研究結果は研究に協力した対象者の傾向を反映するものであって一般化傾向を示すには限界がある。今後はデータ収集方法を検討していくとともに，対象者数を増やしてデータを解析していく必要がある。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり，ご協力頂きましたおしまクリニックに通院されていた患者様をはじめ，関係者の皆様に深く感謝申し上げます。本研究に関して，報告すべき利益相反はありません。

文 献

- 菱沼典子（2021）：COVID-19は看護教育を変える－臨地実習再考－。聖路加看護学会誌，24(2)：37-39。
- 菱沼典子，菅原啓太，上田貴子，他（2020）：COVID-19状況下での保健医療系大学の遠隔授業・臨地実習の対応－公立大学協会看護保健医療部会による調査結果から（第3報）－。三重県立看護大学紀要，特別号：43-47。
- 桑村淳子，栗原明美，中林菜穂，他（2021）：成人看護実習Ⅱ（慢性期）のオンライン実習における学習効果と課題～実習後のアンケート調査結果より～。順天堂保健看護研究，9：58-65。
- 近藤猛，高見秀樹，錦織宏（2020）：オンライン臨床実習にも転用可能なオンラインPBLの実践報告。医学教育，51(3)：276-278。
- Mayeroff M (1965): On caring. International Philosophical Quarterly, 5(3): 462-474.
- 文部科学省高等教育局医学教育課（2020）／新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について（周知），https://www.mext.go.jp/content/20200624_mxt_kouhou_01-000004520_1.pdf. 2021. 6. 17.
- 日本看護系大学協議会（2020a）／新型コロナウイルス感染症拡大にかかる対応について。日本看護系大学協議会ホームページ，http://www.janpu.or.jp/file/20200310_JANPUcoronavirus.pdf. 2021. 9. 13.
- 日本看護系大学協議会（2020b）／新型コロナウイルス感染症拡大にかかる看護系大学への影響及び対応に関する調査結果。日本看護系大学協議会ホームページ，

https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19_surveyAreport.pdf. 2021. 9. 13.

- 西田絵美 (2015) : メイヤロフのケアリング論の構造と本質. 佛教大学大学院紀要, 43 : 35-51.
- 西田絵美 (2018) : 看護における〈ケアリング〉の基底原理への視座 : 〈ケアリング〉とは何か. 日本看護倫理学会, 10(1) : 8-15.
- 佐藤聖一 (2010) : 看護におけるケアリングとは何か. 新潟青陵学会誌, 3 (1) : 11-20.
- 民谷健太郎 (2020) : オンライン臨床実習の実践報告～教員の時間的コスト・労力的コストを抑える工夫～. 医学教育, 51(3) : 252-254.